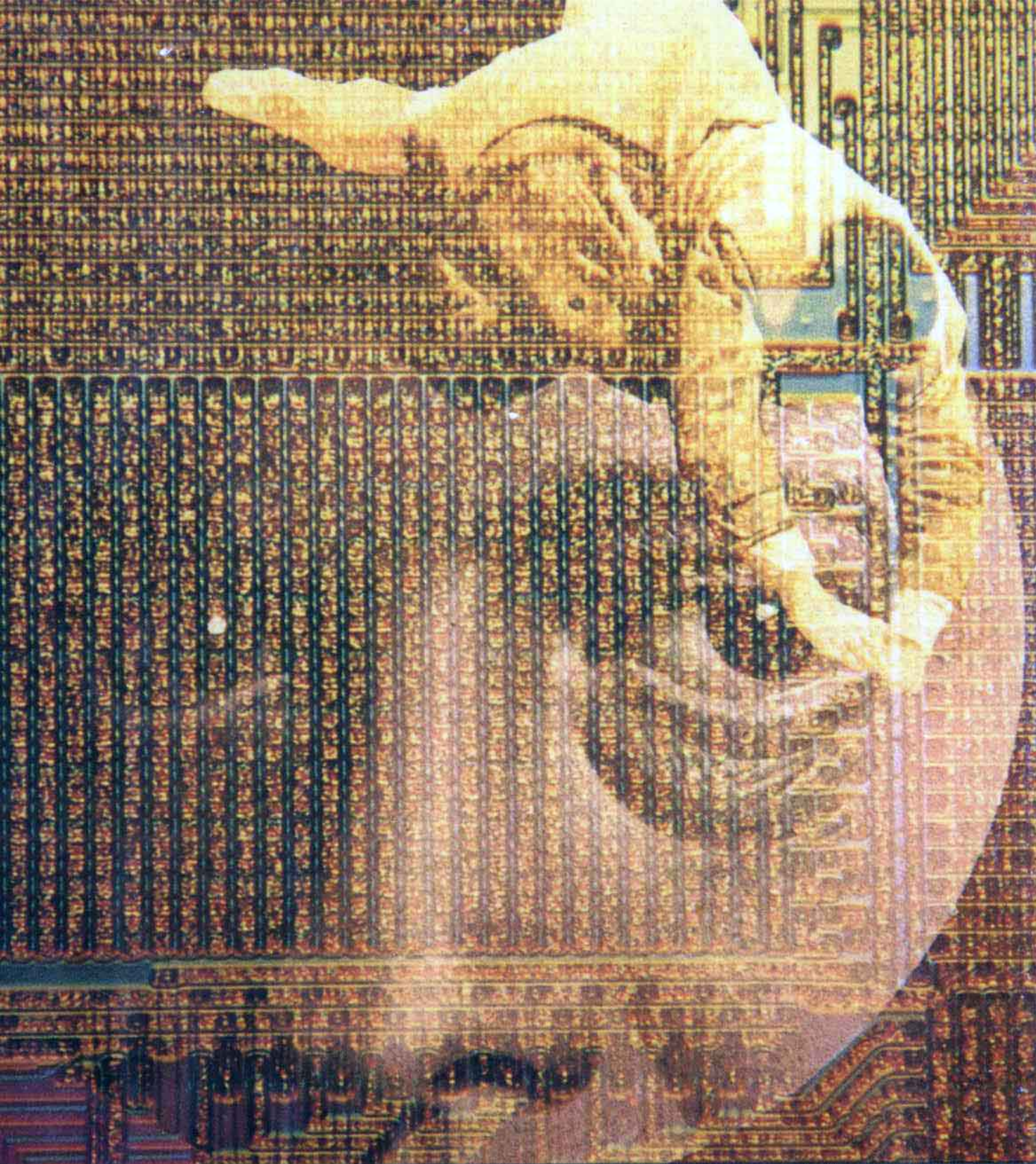




K A P P A N O V E L S

クライム・ノベル

長編犯罪小説

みのしろ
コンピュータの身代

三好 徹

お願い——

この本をお読みになって、どんな感想をもたれたでしょうか。「読後の感想」を左記あてにお送りいただけます。ありがとうございました。なお、このほかに、「カッパの本」では、どんな本を読まれたでしょうか。また、今後、どんな本をお読みになりたいでしょうか。

どの本にも一字でも誤植がないようにつとめておりますが、もしお気づきの点がありましたら、お教えください。ご職業、ご年齢などもお書きそえくだされば幸せに存じます。

東京都文京区音羽二の十二の十三

(郵便番号112)

光文社 出版局

長編犯罪小説 ^{みのしろきん} コンピュータの身代金

昭和56年6月30日 初版1刷発行

定価650円

著 者 ^み三 ^{よし}好 ^{とある}徹

発行者 小 林 武 彦

印刷者 萩 原 崇 男

東京都文京区後楽2-21-12
萩 原 印 刷

発行所 東京都文京区音羽2 株式会社 光 文 社
振替 東京6-115347 電話 東京 (942) 2241 (代)

落丁本・乱丁本は本社でお取替えいたします。 (関川製本)
表紙の模様・意匠登録 116613 © Tōru Miyosi 1981

(分)0-2-93(製)02434(出)2271(0)

Printed in Japan

クライム・ノベル
長編犯罪小説

みの しろ きん
コンピュータの身代金

み よし とおる
三好 徹

コンピュータの身代金 目次	
第一章	誘惑 5
第二章	プロジェクト 44
第三章	実行前夜 80
第四章	その日…… 102
第五章	要求 133
第六章	受け渡し 164
第七章	網 218
第八章	分け前 254
第九章	別れの時 275
あとがき	…… 300

イラストレーション

辰巳四郎

第一章 誘 惑

1

その日は七月上旬の日曜日で、梅雨ときには珍しいよく晴れた日だった。富士山がのしかかってくるかのように見えるゴルフ場の一番ティグラウンドに男二人女一人のプレイヤーが現われたのは、十時を数分すぎたころである。

「いい天気だが、暑くなりそうだな」

そう呟いてゴルフ帽をぬいだ男は、ピンク色のスラックスの女性プレイヤーに、

「おい、タバコ」

といった。

「おやめになったほうがいいわ」

「かまわん。よこせ」

男は横柄にいった。六十歳くらいで、でっぷり肥っている。女は、三十すぎというところだが、やや小柄の色の白い美女である。男に命令されると、しぶしぶとキャディ・バッグからタバコの箱を取り出した。

もう一人の男が、すかさずライターを出して、肥った男の口もとへ持って行った。この男はまだ四十前後である。

「総会も無事に終わって、会長もきょうは久しぶりのゴルフですから」

と弁護するようにいった。

「それはそうですけれど、でも、タバコはおからだによくないわ。健康には注意していただかないと……」

「それはもちろんです。会長には、まだ五年や十年は頑張っていただかなければなりませんから」

「おい、いつまでわしを馬車馬のように働かせる気なんだ？」

「はあ、まことに申し訳ない次第で……ですが、会長は

東西銀行の大黒柱でございますから」

「うむ。稲取君や元井君では、まだ心細いところがあるからな」

会長と呼ばれた男は、満足そうにいつて、タバコをふかした。

「そろそろスタートかしら」

女があたりを見まわしていった。このゴルフ場は、会員数が少なく、日曜日にはビジターを入れないので、ゆっくりとプレイできる。

少し離れたところに立っていたキャディが、クラブハウスの方をちらっと見てから、

「すみません。もう一人、いらっしゃいますから」

といった。

そのとき、サングラスをかけた、がっしりしたからだの男が急ぎ足でやってきた。

「遅くなりました。泉と申します」

と男は帽子をとって挨拶した。

「野山です」

と会長はいい、女は井田と名のり、四十男は藤川と自己紹介した。

すぐに順番が決まった。トップは、泉であった。泉はキャディからブラックスシャフトのドライバーを受け取ると、素振りもせずに、第一打を打った。

快音を残して、白球がフェアウェイのやや左目に飛んだ。二百二十メートルは出たであろう。

「ナイスヨー」

とキャディがいった。井田と藤川も、同じように声を出したが、これはキャディよりも小さな声である。野山は、口をもぐもぐさせただけで、声というほどの声は発しなかった。泉は、帽子のひさしに手をかけ、

「どうも」

とだけいった。

二番目は藤川だった。

「しびれますなア、あんないい当たりを打たれると」といいながらも、やはりいい球を打った。泉ほどではないが、これも二百メートルは飛んでいる。

三人目の井田も、女性としては、まずまずの当たりである。キャディと泉が、ナイスヨーと大きな声でいい、藤川もそれに唱和した。

野山がボールをティアップした。

汗が早くも吹き出している。

「おい、ハンカチ」

野山はフェアウェイを見据えながら、いった。井田圭子が近寄ってハンカチを渡した。泉のほうをちらりと盗み見た。泉は富士山のほうを眺めている。サングラスの奥の目の表情は、誰にもつかむことはできなかった。

野山の態度で、彼と圭子との関係がどういうものか、この泉という男も、それとなく悟ったはずである。どうみても、命令者と被命令者、あるいは、主と従の仲であることがわかるはずである。そして野山は、泉を除く三人のなかでは、自分が圧倒的な権力者であることを、泉という局外者にわからせるように振舞ったのだ——と圭子は思った。

万事を心得ている秘書室長の藤川は仕方がないとしても、見知らぬ他人の前で、そのように扱われることに、圭子はいつも心の痛みを感じるのだ。

野山と二人だけならば、何をいわれ、何をされても我慢できる。腰をもめといわれれば腰をもむし、裸になれといわれれば裸にもなる。あるいは、圭子にとっては苦痛でしかない態位をとれといわれてもそうするし、口に

含めといわれればそれに従う。それなりの代償を圭子は手にしているのだ。

それは承知だったが、見知らぬ第三者の前で、女奴隷のように扱われることは、反抗できないだけに切なかった。

しかし、泉という男は、まったく素知らぬ顔で、富士山を眺めている。圭子は、そこにこの男の優しさを感じた。

（誰かがいっていたわ。優しさとは、人のそばに憂いが立っていることだ、と）

そのとき、野山が第一打を打った。ボールは五十メートルほどゴロゴロ転がったただけだった。

（いいきみだわ）

と圭子は思った。

野山はクラブを放り出すようにキャディに渡した。

泉という男は、キャディと何か話しながら歩いて行く。

野山の粗暴な振舞いにも、気がつかないようにしていた。

野山は第二打をアイアンで打ち、こんどはかなり飛ばした。藤川はほっとしたように、

「ナイス、リカバリー」

と声をかけた。

ついで圭子が第二打を打ち、これはバンカーに入った。藤川は、ショートアイアンを握った。グリーンまで百二十メートルくらいである。しかし、彼の球は、グリーンをオーバーして、これまたバンカーに入った。そして、ほぼ同じところから打った野山は、グリーンにのせた。ピンからは十五メートルもあったが、ともかくものつたのである。

「ナイス、オン！」

と藤川と泉がいった。

泉はピッチングで、ピンそば二メートルにのせた。どうやら、シングル・ハンドの腕前らしい。

藤川は、バンカーから三回かかって、ようやく脱出した。

圭子には、それが故意に三回かけたものとわかっていた。藤川は、この出だしのホールだけは、野山よりも悪いスコアにしようと、はじめから決めてプレイしているのだ。

圭子はバンカーに入って、サンドウェッジを構えた。上り斜面にとまっているので、バンカーショットとして

は、やさしいほうである。

泉がわきに立って眺めている。圭子は意識すると、ちょっと緊張した。こういうときは、どんと打ちこみさえすれば、ボールは出るのだ。無心に振り上げ、あとはボールの手前に打ちこむだけでいい。

圭子は足場を固め、そのとおりに打ちこんだ。

ボールは、ふわっと飛び出し、一つの意味を持ったように転がって、カップに消えた。

圭子はクラブを放り出し、声をあげた。

「お見事」

泉が静かにいった。濃いサングラスの奥の目が笑っているかのようであった。

「圭子、やるじゃないか」

野山がいった。そして、

「よし、この長いやつを、青木ふうに一発で決めるか」と呟き、コツンと打った。

その第一パットは、五メートルもオーバーした。そして、第二パットは二メートルもショートした。本来は、ここで、三メートルの距離につけている藤川の番であるが、野山はかとなったのか、続けざまに打った。それ

が一メートルも余計に転がり、その返しも、カップのふちをなめた。

「オーケイ」

と泉が低い声でいった。

野山はパターで、ボールをはじき飛ばした。何と五パットもやったのである。

彼は、グリーンのわきに立って、荒い息をついた。

太陽が照りつけている。圭子は急いで近寄って行き、ハンカチを差し出した。藤川と三人だけなら、野山がいかにも殿様ゴルフをしようと構わない。しかし、泉という第三者が入っているのだ。

どうせ、すいているゴルフ場なのだ。キャディ・マスターにだって、三人だけでスタートさせてもらえばよかった、と圭子は思った。泉には、別の三人の組に入ってもらっても、よかっただろう。そのほうが、こころよくプレイできたに違いない。

「うむ」

野山が横柄にうなずいて、ハンカチを受け取ろうとした。

その手が不意にダランと下がった。同時に、野山は右

ひざから落ちるように、グリーンの上に倒れた。

「会長！」

しかし、野山はうつろな目で横たわったままだった。

2

「動かしてはいけない」

と泉が低い声でいった。

「キャディさん、救急車だ」

藤川が興奮して叫んだ。

「ほんとこの方とで見えてあげますよ。キャディ任せにするよりも、あなたもいっしょにクラブハウスへ戻って、手配したほうがいいでしょう」

たしなめられて気がついたとみえ、

「じゃ、お願いします」

と藤川は駆け出して行った。

圭子は野山のわきにかがみこんだ。野山はいぜんとして、うつろな目である。しかし、死んではいない。その証拠に、からだの下になった手がびくびく震えている。どうやら、立ち上がろうとする意思をもっているようだ

った。

圭子は動転して、声も出なかった。

いま目の前で、おそらくは脳溢血を起こした人物、東西銀行会長である野山大次郎、圭子のパトロンというよりも彼女を所有してきた男は、死んではいけないとしても、死の淵に立たされていることは確かであった。

かりに、この男が死んだとしても、圭子はさほど悲しみを感ずることはないだろう。野山がパトロンになってから、すでに三年たっているが、圭子は大して情を湧かすことができなかった。

圭子が住んでいるマンションも、圭子の名義ではなかった。丸の内にある東西銀行本店から、車で十分ほどの麴町こうじまちにあるが、それは銀行が会長専用の休息所として買ったものである。

また銀座の店も、銀行の系列会社である不動産会社の名義になっていた。あるいは、このゴルフ場の一千万円はするという会員権にしても、法人会員で、名義だけを圭子のものにしてにすぎない。

圭子のものとしては、きょうゴルフ場にくるとき乗ってきたアメリカ製の車くらいのものだ。

むろん、彼女なりに、貯えてはきた。いや、むしろ野山がそのような人物だったからこそ、貯めてきたといってもいい。

しかし、このさき、野山の援助がなくなっても、のんきに遊んでいられるほどの財産はない。銀座の店が続けられるならば、やとわれマダムであっても、かなりの収入はある。

だが、野山が死んでしまえば、お払い箱になるかもしれない。現に三年前、野山が会長になって銀行の実権を握ったとき、前任者の愛人だった前のマダムは、クビになってしまい、圭子がその後釜あとがまに坐ったのだ。そういう他人の昨日の運命が、あすはわが身のものとなるかもしれないのである。かりに野山が死なないとしても、半身不随となれば、同じようなことになる可能性もある。

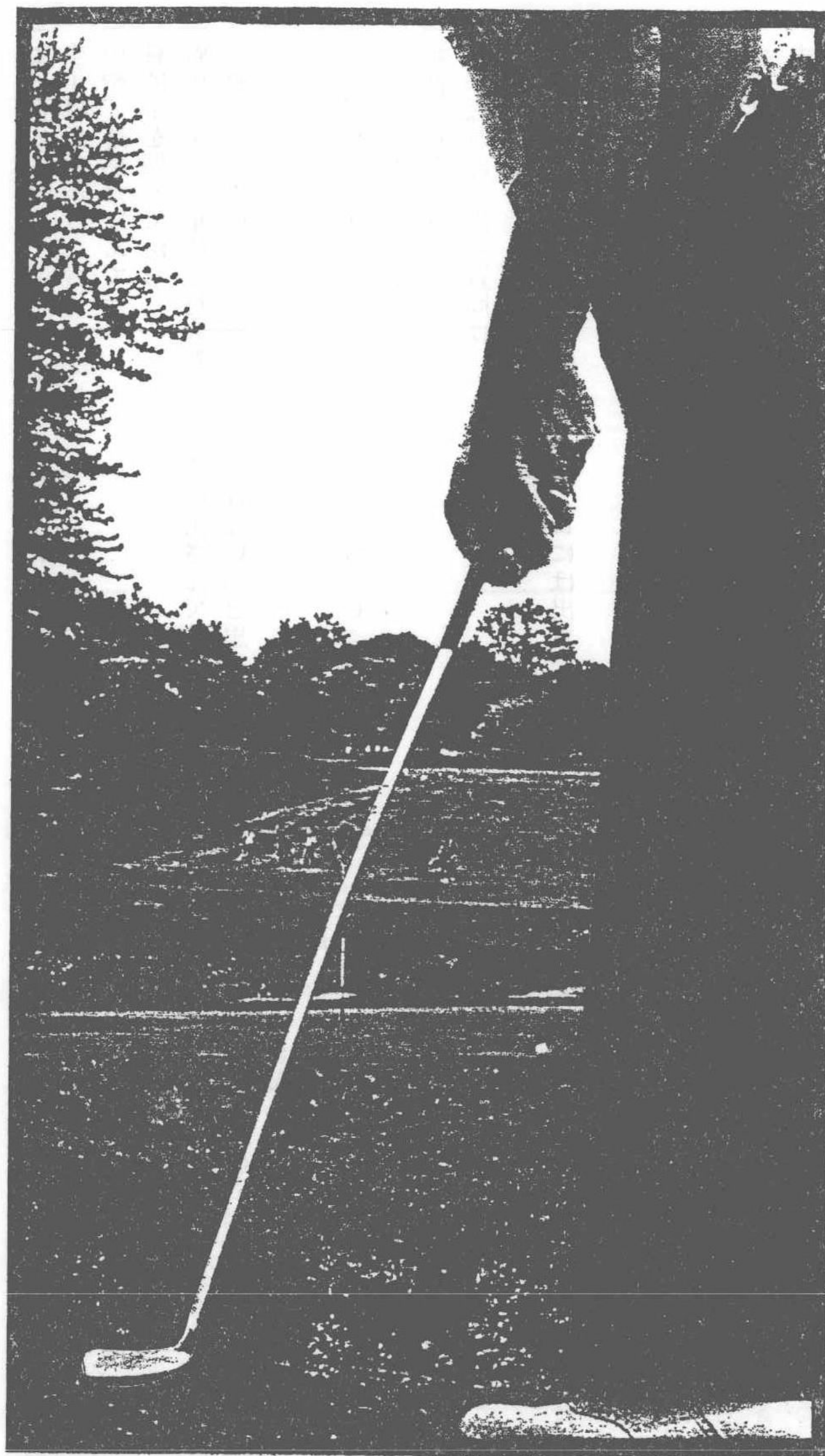
（そのときは、どうしよう？）

圭子は心細かった。

愛情を感じているわけではないが、いま死なれては、大いに困るのだ。

「大丈夫ですよ」

まるで、圭子の胸を見ぬいたかのように、泉がいった。



「ご迷惑をかけまして、申し訳ございません」

圭子は頭を下げた。

「いや、迷惑だなんて」

泉は手を振ってから、

「野山さんは、東西銀行会長の、あの野山さんですか。

さっき、バッグの名札を見て、そうではないかと思って
いたんですが……」

「はあ」

「やっぱり、そうですか。で、藤川さんとおっしゃる方
は、銀行の方ですか？」

「秘書室長をなさっている方です」

そうなれば、次の質問は、

「あなたは？」

というのが順序だが、泉はさすがに、口には出さな
かった。

「直射日光は、よくないかもしれませんね。キャディが
傘でも用意しておいてくれればよかったのだが……」

といって、キャディカートを調べに行った。

傘の用意はなかった。

圭子は、自分のバッグから、スポーツタオルを出して、

野山の顔の部分だけは、日光があたらないようにした。

泉は親切だった。

「それは、ぼくが持ってあげましょう。あなたは、胸を
はだけて楽にしてさしあげなさい」

といった。

圭子は、いわれるままに、野山の胸ボタンをはずした。
野山はしきりにまばたきをくりかえした。口も動いてい
る。何かいいたいらしいが、声にはならない。

「あの……大丈夫でしょうか」

と圭子は泉を振り仰いだ。

「大丈夫ですよ。目をパチパチやっていますからね。駄
目な人は、目が動きません」

圭子は、そういうものか、と思った。

ティグラウンドで初めて顔を合わせたときの印象は、
余分なことをいわぬ無口な男というものだった。もっと
も、上手なプレイヤーは、概して無駄口をたたかぬもの
である。他人がどうであれ、黙々として、自分のプレイ
に集中する。しかし、思いがけない野山の発作で、ゴル
フどころではなくなっている。ゴルフをはなれたときの
泉は、決して無口ではないのかもしれない。なかった。

泉は、フェアウェイにきている後続組のところまで行って、一番ホールをパスするようにいった。

後続のプレイヤーたちは、グリーンの上に横たわっている野山と圭子のほうへ、好奇心と同情の半々のまなざしを送りながら、通りすぎて行く。

「パットのときが、血圧が上がるそうだね」

「アメリカの大統領だったアイゼンハワーは、グリーンにオンしたら、2パットということに決めてあったという話だよ」

というやりとりが聞こえてくる。

「野山さんは、日ごろから血圧が高かったんですか」

と泉がいった。

「さあ……」

圭子は首をかしげた。そういう話は、聞いていなかったのだ。もっとも、ゴルフ場で倒れる人の多くは、血圧の高い要注意者とは限らない。そういう人は、むしろ用心しているの、緊張の高まるようなゴルフは避けるものである。

「東西銀行というと、たしか副頭取が稲取さんで、元井さんが専務でしたね」

と泉がいった。

「わたくし、よく存じません」

と圭子はいった。本当は知っていたのだ。しかし、知っているとはいいいにくかった。泉という男には、野山と圭子との関係がうすうすわかっているのかもしれないが、圭子の口からそれを認めたくなかった。なるべく、深い関係ではないように思っただけだった。

「それにしても、まさかこんな……」

泉は何かいにかけたが、不意に口をつぐんだ。

そのとき、ようやく藤川がオートカーにのって戻ってきた。

「いま救急車を手配してきました。もうすぐくると思います」

と彼はいった。泉と圭子の両方へ向かっていっていた。

「そりゃ、よかった」

「どうもご迷惑をおかけして……」

と藤川は泉に頭を下げた。

それから彼は、圭子のところに近寄ってくると、小声でいった。

「病院へは、わたしが付き添って行きます。あなたは、

ひとまず帰ったほうがいいでしょう」

野山の家族に連絡しなければならぬのである。むろん、妻の高子が飛んでくるであろう。そのとき、圭子がいっしょにいては、まずいことになる。藤川はそれをしていっているのだ。

「ええ、そうします。稲取副頭取や元井専務へも知らせなければなりませんものね」

「それはそうなんだが……」

「もしかすると、あの泉さんという方は、副頭取や専務のことをご存じなのかもしれませんわ」

「それ、本当？」

「さっき、そんなことをちらっと口にしていましたから」

「弱ったな。こういうことは、あまり外部の人に洩れないほうがいいんだが……」

藤川は不安そうに泉を見た。

野山は、いわゆるワンマン会長である。序列からすれば、ナンバー2は稲取であり、ナンバー3は元井となるが、実質的には、東西銀行には、ナンバー2も3もなく、この二人がナンバー4と5くらいになる。つまり、ナン

バー1が強大すぎて、他の幹部は影のうすい存在になっていた。

しかし、野山が倒れたとなると、情勢は変わってくる。死亡しない限り、当面は野山が会長職に留まるとしても、誰かが経営の指揮をとらねばならないのだ。

これまでは、野山が重要事項の全てについて、決裁を下していた。稲取も元井も、野山の意向には逆らえなかった。

だが、野山は、しばらくの間は（もしかすると永久にということもありうるが）、決裁を下すことはできない。そうになると、二人のうち、どちらかが野山の代行をすることになる。

順序や内規からすると、それは副頭取の稲取が代行することになるが、といって、順序や内規などというものは、決定的な力をもっているわけではない。具体的には、どちらが先に、野山のもっている権限を自分の手におさめるかによって決まってくる。

野山自身は、稲取も元井も、小僧ツ子扱いにしていた。ただ、どちらかといえば、元井のほうを買っていた。

稲取は、行内においては、影が薄かった。副頭取とい

うと聞こえはいいが、現実には、閑職であった。まわってくる書類に判を押すだけといってもよかった。

野山自身は、まだ五年や十年は、会長の椅子に坐り続けるつもりだったはずである。そして、五年後には、稲取はもはや副頭取でさえなくなっているだろう、と見られていた。

3

救急車が到着して、藤川がそれにのりこみ、野山を運んで行った。

圭子はクラブハウスに戻って、服を着かえた。

こうなっては、帰るしかなかった。病院へ行っても、彼女の居場所はないのである。

ロッカールームを出てから、彼女は食堂へ行つて、コーヒーを飲んだ。

野山が死ぬか再起不能になった場合のことを考えると、やはり不安が襲ってくる。もしかすると、すぐにマンションを追い立てられるかもしれないのだ。

野山大次郎という男に、愛情をもっているわけではな

い。野山に抱かれていて、官能の疼きを感じたことはない。声をあげたり、からだをのけぞらせたりしてみせるが、それは野山を満足させるためのものだった。心は冷えていた。

自分の店を持てるだけの資金ができたなら、そくぎに野山との縁を切るだろう。圭子は三十三歳であった。六十を過ぎた老人の愛玩物として日を送るのでは、あまりにも自分がかawaiiそうだった。いまはまだしも、この先、いつお払い箱になるかもわからない。四十になったら、野山は相手にすまい。そのときは、別の女が野山の愛玩物となり、圭子は放り出されるのだ。

圭子は、この三年の間に、せっせと貯えていたが、それでも、思ったほどには貯えることはできなかった。

たまったのは、店で着る着物とかドレスの類い、帯、バッグ、草履、靴といった品物である。

そういうものは、買うときは、けっこう高い値段だったが、決して財産とはいえない。売れば、二束三文なのだ。

金目のものといえば、指輪と毛皮のショールやコートくらいのものだ。それだって、売れば大したことはない。